奉行所

佐渡の鉱物資源は、江戸時代（1603-1868）に日本を支配した将軍家、徳川家にとって大きな力の源だった。徳川家が佐渡を支配したのは 1600 年のことで、ちょうど相川のゴールドラッシュが始まった頃だった。1603 年に徳川幕府が正式に成立すると、将軍は時間をかけずに佐渡と島の金鉱の正式な管理を確立した。島は大久保長安（1545-1613）という奉行の管理下に置かれた。同年、大久保とその後任の奉行たちの拠点となる、広い屋敷が建てられた。

奉行は、この広大な屋敷で佐渡を統治するとともに、採掘と貨幣鑄造を監督した。2000 年、相川の専門チームが図面、記録文書、考古学的証拠を用いて 1859 年当時の木造建築を再現した。再建されたエリアには、屋敷の正門、管理施設、司法施設、鉱山管理施設、選鉱場が含まれる。

中央の建物群の特筆すべき場所は、奉行や役人が佐渡の地健を取り仕切った一対の囲われた中庭である。申立人や被疑者は中庭の砂利の上にひざまずき、判決を下す役人はその上に座り、室内の一段高くなった畳の部屋から見下ろした。

見学者は、建物群の南側から発掘された 172 枚の楕円形の鉛板のうちの 1 枚、41 キログラムの鉛板を持ち上げてみる事ができる。鉛の板は、キューベーションと（灰吹法）と呼ばれる工程で金銀を製錬するために使われたもので（現在も使われている）、この鉛はその目的で手元に保管されていた。地元の記録によれば、鉛は 1600 年代後半に 2 か所に埋められたが、1718 年に作業員が掘り起こしに行ったときには一部が見つからなかった。その後、鉛は 2 世紀後の 1995 年によく発見された。

大久保長安と佐渡能

大久保は、最初に佐渡に派遣された代官であるが、当時の多くの奉行とは異なり、武士の家柄ではなかった。大久保の父と祖父は、能楽の前身である猿楽の演者であった。しかし、大久保には経営者としての才能があり、徳川の初代将軍である徳川家康（1543-1616）をはじめとする有力な権力者の目に留まるようになった。家康は、彼に日本各地の金銀鉱山の開発を任じた。

それにもかかわらず、大久保は自身の演劇のルーツとのつながりを持ち続けた。1605 年、佐渡に能舞台を作り、本土から役者や囃子方の一座を招いて公演させた。能の人気はそこから広がっていき、最盛期には佐渡に約 200 の舞台があり、そのほとんどが神社に付属していた。そのうち 34 の舞台が現在も残っている。